Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

原　著

夜間保育の子どもへの影響に関する研究

国立身体障害者リハビリテーション研究所　安梅　勅江
東京福祉大学　呉　栽喜

抄　録

本研究は、夜間を含む保育サービスを利用している子どもの発達や適応に対する、保育形態（昼間・夜間）、育児環境、保護者の状況の複合的な影響を明らかにし、今後の課題を検討することを目的とした。全国の認可夜間保育所（全41個所）のうち22ヵ所の保育所にて保護者及び園児の担当保育専門職を対象に質問紙調査を実施した。有効回答は保護者1,949名（回収率73.0%）、園児（保育専門職による回答）2,905名（回収率74.6%）であった。本研究の結果を要約すると以下の通りである。

(1) 子どもの発達状態には、「保育の形態や時間帯」ではなく、「家庭における育児環境」及び「保護者の育児への自信やサポートの有無」などの要因が強く関連していた。

(2) したがって、特に夜間保育園においては、家庭的な環境をいかに充実するかが重要な課題となる。物理的な環境、人的な環境、保育プログラムを含め、子どもの育ちに適合した家庭的な環境をさらに整備する必要がある。

(3) さらに、保育園の役割として、育児に関する相談相手となり、保護者の育児への自信の回復を促すなど、保護者に対する「子育てを支える」ための地域に開かれたサービスの充実が期待される。

(4) 現実として、深夜保育には通常保育より発達にやや遅れのみられる子どもの在籍している割合が高いことから、通常保育よりさらに専門性の高い保育スタッフの配置が必須である。

(5) 夜間保育の子どもに対する影響を本当の意味で明らかにするためには、今後さらに経年的な研究を継続する必要がある。

キーワード：夜間保育、発達、育児環境、保育ニーズ、少子化

1. 緒言

少子高齢社会の到来により、少子化対策として、保育サービスの充実に対する社会的な要請は高まる一方である。核家族化をはじめ女性の社会進出の進展、子育てと就労の両立を求める者が増大する中、保育所の役割の拡大が強く期待されている。特に、保育時間の延長、低年齢児の保育、休日保育など、保育のニーズの多様化は著しく、保育所には柔軟性に富んだ子育ち、子育て支援の拠点としての役割が求められている。

一方、社会福祉基礎構造改革の動きに見るように、保健福祉サービスの評価に関する必要性はますます高まっており、サービスの質の向上に資する実践に役立つ指標開発が求められている[1, 2]。

保育所は、戦後児童福祉法により、「女性の働く権利と子どもの発達」を同時に保障する社会的施設として設置された。しかし、保育時間が短いために、保育所が「働く女性の権利」を必ずしも十分に保障していないとする意見もある[3]。

夜間における保育については、長年実証的な研究による根拠のほとんど無いまま、子どもの成長発達に悪影響を及ぼすとした見解がその普及と理解を阻む大きな原因となってきた[4]。

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

また、25年以上も前の調査である「保育所における長時間保育実施上の諸条件に関する研究」(1974年、厚生省)[5]の結果から、長時間の母子分離は子どもの発達に悪影響を与えるとし、「問題行動の出現は保育時間が8時間群よりも、9時間群、10時間群になるにしたがって多くなる傾向を示したことから、保育時間の延長は望ましくない」に基づき、近年まで長期にわたり8時間が保育時間としては限度であるとされてきた。

しかし一方で、認可夜間保育所の百倍以上の認可外のいわゆるベビーホテルが現存している事実がある。認可夜間保育所の定員は1,500人、認可外の保育所の利用者は12万人以上(総理府、1998年)に達すると報告されている。

1980年代のベビーホテル問題の発生、また未だ根深いいわゆる「母性神話」などによる無差別な夜間保育に対する偏見は、長く質の高い夜間保育サービスを提供してきた夜間保育所に対しても無理解と誤解を生じている。夜間・昼間保育を問わず、「保育の質の評価」を度外視した議論は、それ自体、保育サービスの本来有るべき姿、すなわち子育ち、子育てを支える専門的な支援機関として、常によりよいサービス提供のために切磋琢磨する理念を歪めるものになりかねない。

そこで本研究は、全国の認可夜間保育サービスを利用する子どもの発達、適応状況に影響を与える要因について、育児環境に焦点を当て科学的な根拠を求めたものである。

育児環境がその後の子どもの発達に影響を及ぼすとした研究は、世界各国に数多く存在する[6)~11)]。特に育児環境をシステムとして捉え体系化した研究[12)]は、日本にも大きな影響を与え、すでに多くの研究が蓄積されている[13)~18)]。夜間保育サービスの育児環境に焦点を当てることで、子どもの発達に影響する要因をより鮮明にすることを意図した。

本研究の仮説は、「昼夜を問わず、質の高い保育サービスの提供により、子どもの発達への悪影響は回避でき、むしろ家庭及び保育所における育児環境の整備や、保護者への子育てサポートのさらなる充実が子どもの発達保障にとって重要である」とした。

本研究の目的は、夜間を含む保育サービスを利用している子どもの発達や、適応に対する保育形態(昼間・夜間)、育児環境、保護者の状況などの複合的な影響を明らかにし、今後の課題を検討することである。

2. 研究対象と方法

(1) 研究対象

全国の認可夜間保育所(全41個所)のうち22ヵ所の保育所にて保護者及び園児の担当保育専門職を対象に調査を行った。有効回答は保護者が1,949名、園児(保育専門職による回答)が2,905名であった。協力園における回収率は保護者が73.0%、園児が74.6%であった。

園児の性別は、男児が1,501名(52.3%)、女児が1,370名(47.7%)、年齢は0歳児が74名(2.6%)、1歳児が334名(11.6%)、2歳児が453名(15.7%)、3歳児が510名(17.7%)、4歳児が584名(20.3%)、5歳児が543名(18.8%)、6歳児が379(13.2%)、7歳児が5名(0.1%)であった(表1)。

保育形態は、通常保育群(18時29分まで保育)、延長・夜間保育群(18時30分~22時29分の保育)、深夜保育群(22時30分以降の保育)の3つのグループに分類した。通常保育群が1,210名(62.1%)、延長・夜間保育群が415名(21.3%)、深夜保育群が324名(16.6%)であった。

表1 園児の性別と年齢

項目	人数	割合
性別		
男児	1,501	52.3%
女児	1,370	47.7%
年齢		
0歳児	74	2.6%
1歳児	334	11.6%
2歳児	453	15.7%
3歳児	510	17.7%
4歳児	584	20.3%
5歳児	543	18.8%
6歳児	379	13.2%
7歳児	5	0.1%
合計	2,882	100.0%

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

(2) 研究方法

調査方法は、夜間保育及び付属の昼間保育所を利用する保護者と保育専門職に対する質問紙調査、さらに、そのうち24時以降の保育を実施している21カ所の保育園への福祉・保健・保育・教育・心理領域の複数の専門調査員の訪問による保護者、保育専門職、園長への面接調査、子どもの観察調査を実施した。

質問紙の内容は、1）育児環境を把握するための項目として（保護者による回答）、①一日子どもと向き合って遊ぶ時間（平日）、②一日子どもと向き合って遊ぶ時間（休日）、③子どもと一緒に買い物に行く機会、④子どもの歌を一緒に歌う機会、⑤子どもに本を読み聴かせる機会、⑥同年代の子どもを持つ友人や親戚との往来、⑦父親（母親）の育児協力の頻度、⑧子どもが両親と一緒に食事する機会、⑨一週間のうち子どもを叩く回数、⑩子どもと一緒に公園などに行く機会、⑪保育園以外に子どもの面倒を見てくれる者の有無、2）子どもの発達・健康状態に関する項目（担当保育専門職による回答）として、①運動発達、②知的発達、③言語発達、④社会性発達、⑤障害の有無、⑥病気になりやすさ、3）子どもの保育園への適応に関する項目（保護者による回答）として、子どもが保育園に行くのを楽しみにしているか、4）保護者の育児意識に関する項目（保護者による回答）として、①育児に関する自信がなくなる、②自分のやりたいことができなくてあせる、③なんとなくイライラする、④仕事上ストレスがたまる、⑤とても疲れる、⑥育児者と保母との相談頻度、であった。

面接調査の内容は、1）子ども及び保護者の現状、2）保育サービスに対するニーズ、3）夜間保育におけるサービスの現状、4）サービスの工夫など、観察調査の内容は、1）子どもの発達状態、2）夜間保育における子どもの生活状況、3）夜間の保育環境の実態などであった。

分析方法としては、1）深夜保育群、延長・夜間保育群、通常保育群の3群別に、育児環境、子どもの保育園への適応、保育園利用による子ども及び保護者の変化などとの関連を、カイ二乗検定にて検討した。

2）判別分析を用い、子どもの発達状態、及び保育園への適応について、最も強く関連する複数の要因の組み合わせを検討した。説明変数が目的変数に及ぼしている影響の大きさと向きを表す「標準化判別係数」と統計的な有意性を判定する度合いを表す「WilksのLambda」（いずれも1に近いほど影響が大きいことを示す）を求めた。

目的変数としては、①子どもの発達（正常、やや遅れ）、②保育園への適応（保育園に行くのを楽しみにしている、していない）、説明変数としては、①保育形態（深夜保育、非深夜保育）要因、②育児環境要因、③子どもの発達要因、④保育園利用後の変化要因、⑤保護者の育児に関する意識要因をとりあげた。

具体的な分類方法は以下の通りである。

① 保育形態は、保育形態として「深夜保育群」、それ以外の「非深夜保育群」の2群に分類した。

② 育児環境は、「一日子どもと向き合って遊ぶ時間（平日）」、「一日子どもと向き合って遊ぶ時間（休日）」、「子どもと一緒に買い物に行く機会」、「子どもの歌を一緒に歌う機会」、「子どもに本を読み聴かせる機会」、「同年代の子どもを持つ友人や親戚との往来」、「父親（母親）の育児協力の頻度」、「子どもが両親と一緒に食事する機会」、「一週間のうち子どもを叩く回数」、「子どもと一緒に公園などに行く機会」、「保育園以外に子どもの面倒を見てくれる人の有無」など、子どもと保護者の日常生活におけるかかわりの頻度を25パーセンタイル値で2分し2群とし、また名義尺度は「適切」、「不適切」で2群とした。

③ 子どもの発達状況は、運動発達、知的発達、言語発達、社会性発達につき、「正常」、「やや遅れ」の2群に分類した。

④ 保育園利用後の変化は、「子どもは保育園に行くのを楽しみにしている」を有無で2群とした。

⑤ 保護者の育児意識は、「育児に関する

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

自信がなくなる」、「自分のやりたいことができなくてあせる」、「なんとなくイライラする」、「仕事上ストレスがたまる」、「とても疲れる」の有無で2群とした。

表2　育児環境と保育形態の関連

（　　）の中は%

	通常保育群	延長・夜間保育群	深夜保育群
子どもと一緒に遊ぶ機会			
1歳～2歳児＊＊			
めったにない	7（ 2.1）	3（ 2.5）	3（ 4.4）
1週に1～2回	44（ 13.5）	33（ 27.7）	19（ 27.9）
1週に3～4回	23（ 7.0）	12（ 10.1）	2（ 2.9）
1週に5～6回	15（ 4.6）	7（ 5.9）	4（ 5.9）
ほぼ毎日	234（ 71.6）	61（ 51.3）	40（ 58.8）
その他	4（ 1.2）	3（ 2.5）	
合計	327(100.0)	119(100.0)	68(100.0)
子どもと一緒に買い物に行く機会			
0歳児＊			
めったにない			2（ 15.4）
1月に1～2回	2（ 18.0）		2（ 15.4）
1週に1～2回	18（ 72.0）	9(100.0)	5（ 38.5）
1週に3～4回	1（ 4.0）		3（ 23.1）
ほぼ毎日	4（ 16.0）		1（ 7.7）
その他			
合計	25(100.0)		13(100.0)
1歳～2歳児＊			
めったにない	9（ 2.8）	4（ 3.3）	2（ 2.9）
1月に1～2回	16（ 4.9）	12（ 1.0）	3（ 4.4）
1週に1～2回	169（ 51.7）	81（ 67.5）	35（ 51.5）
1週に3～4回	66（ 20.2）	15（ 12.5）	14（ 20.6）
ほぼ毎日	65（ 19.9）	（ 6.7）	14（ 20.6）
その他	2（ 0.6）		
合計	327(100.0)	120(100.0)	68(100.0)
4歳児以上＊＊			
めったにない	15（ 2.3）	5（ 2.2）	5（ 2.7）
1月に1～2回	47（ 7.3）	29（ 12.7）	20（ 11.0）
1週に1～2回	310（ 47.9）	141（ 61.6）	87（ 47.8）
1週に3～4回	163（ 25.2）	37（ 16.2）	36（ 19.8）
ほぼ毎日	109（ 16.8）	16（ 7.0）	32（ 17.6）
その他	3（ 0.5）	1（ 0.4）	2（ 1.1）
合計	647(100.0)	229(100.0)	182(100.0)
子どもに本を読み聴かせる機会			
4歳児以上＊			
めったにない	102（ 15.8）	39（ 17.2）	44（ 24.0）
1月に1～2回	114（ 17.6）	42（ 18.5）	35（ 19.1）
1週に1～2回	210（ 32.5）	56（ 24.7）	45（ 24.6）
1週に3～4回	106（ 16.4）	38（ 16.7）	24（ 13.1）
ほぼ毎日	105（ 16.3）	47（ 16.3）	27（ 14.8）
その他	9（ 1.4）	5（ 1.4）	8（ 4.4）
合計	646(100.0)	227(100.0)	183(100.0)
子どもの歌を一緒に歌う機会			
4歳児以上＊＊			
はい	551（ 89.2）	192（ 85.7）	138（ 80.2）
いいえ	67（ 10.8）	32（ 14.3）	34（ 19.8）
合計	618(100.0)	224(100.0)	172(100.0)
父親（母親）の育児協力頻度			
1歳～2歳児＊			
まったくしない	7（ 2.2）	5（ 4.2）	1（ 1.6）
1か月に1回位	20（ 6.3）	4（ 3.4）	7（ 11.1）
週に1～2回位	65（ 20.6）	20（ 16.9）	16（ 25.4）
週に3～4回位	27（ 8.6）	5（ 4.2）	6（ 9.5）
毎日	177（ 56.2）	69（ 58.5）	25（ 39.7）
その他	19（ 6.0）	15（ 12.7）	8（ 12.7）
合計	315(100.0)	118(100.0)	63(100.0)
子どもが両親と一緒に食事する機会			
4歳児以上＊＊			
めったにない	12（ 1.9）	6（ 2.7）	8（ 4.5）
1か月に1回位	17（ 2.6）	6（ 2.7）	4（ 2.2）
週に1～2回位	128（ 19.8）	59（ 26.3）	35（ 19.6）
週に3～4回位	53（ 8.2）	38（ 17.0）	18（ 10.1）
毎日	405（ 62.8）	109（ 48.7）	106（ 59.2）
その他	30（ 4.7）	6（ 2.7）	8（ 4.5）
合計	645(100.0)	224(100.0)	179(100.0)
同年代の子どもを持つ友人や親戚との往来			
1歳～2歳児＊			
めったにない	110（ 33.7）	55（ 45.8）	22（ 32.8）
1か月に1回位	128（ 39.3）	43（ 35.8）	25（ 37.5）
週に1～2回位	53（ 16.3）	14（ 11.7）	16（ 23.9）
週に3～4回位	6（ 1.8）		3（ 4.5）
毎日	7（ 2.1）	1（ 0.8）	1（ 1.5）
その他	22（ 6.7）	7（ 5.8）	
合計	326(100.0)	120(100.0)	67(100.0)
4歳児以上＊＊			
めったにない	245（ 37.9）	113（ 49.3）	67（ 36.8）
1か月に1回位	198（ 30.6）	74（ 32.3）	57（ 31.3）
週に1～2回位	137（ 21.2）	21（ 9.2）	34（ 18.7）
週に3～4回位	26（ 4.0）	4（ 1.7）	7（ 3.8）
毎日	15（ 2.3）	2（ 0.9）	3（ 1.6）
その他	26（ 4.0）	15（ 6.6）	14（ 7.7）
合計	647(100.0)	229(100.0)	182(100.0)

注）＊＊：1％水準有意、＊；5％水準有意

3.　研究結果

(1)　保育形態と育児環境の関連

育児環境と保育形態の関連をみると、通常保育群に比較し、深夜保育群及び延長・夜間保育群は関わりの乏しい項目が数個見られた（表2）。

具体的には、かかわりの乏しい者の割合は、深夜保育群で「子どもと一緒に遊ぶ機会」（1～2歳児：通常保育群、延長・夜間保育群、深夜保育群各々2.1％、2.5％、4.4％、以下同様）、「子どもと一緒に買い物に行く機会」（0歳児：0％、0％、15.4％、4歳児以上：2.3％、2.2％、2.7％）、「子どもに本を読み聴かせる機会」（4歳児以上：15.8％、17.2％、24.0％）、「保護者が子どもの歌を一緒に歌う機会」（4歳児以上：10.8％、14.3％、19.8％）、「配偶者の育児協力度」（1～2歳児：8.5％、7.6％、12.7％）、「子どもが両親と一緒に食事をする機会」（4歳児以上：1.9％、2.7％、4.5％）、延長・夜間保育群で「子どもと一緒に買い物に行く機会」（1～2歳児：2.8％、3.3％、2.9％）、「同年代の子どもを持つ友人や親戚との往来」（1～2歳児：33.7％、45.8％、32.8％、4歳児以上：37.9％、49.3％、36.8％）が通常保育群に比較し有意に少なくなっていた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

一方、虐待など望ましくない育児につながる「子どもを叩く回数」、「子どもの誤りに対する対応」における不適切なかかわりについては、どのような保育形態においても有意な差異は認められなかった。

(2) 保育形態と子どもの発達状態の関連

子どもの発達状態として、運動発達、知的発達、言語発達、社会性発達について検討した（表3）。

その結果、運動発達（4歳児以上：3.4%、1.8%、5.4%）、知的発達（1～2歳：1.2%、1.2%、7.0%）、社会性発達（1～2歳児：2.5%、1.9%、9.5%）において深夜保育群が、延長・夜間保育群、通常保育群に比べ、発達状態がやや遅れている子どもの在籍の多い傾向がみられた。

保育園への適応についてはいずれの群の間にも有意な差異はみられなかった。

表3　保育形態と子どもの発達状態の関連

	通常保育群	延長・夜間保育群	深夜保育群
運動発達			
4歳児以上＊			
正　常	874(96.6)	318(98.1)	106(94.6)
やや遅れ	19(2.1)	5(1.5)	6(5.4)
遅　れ	12(1.3)	1(0.3)	
合　計	905(100.0)	324(100.0)	112(100.0)
知的発達			
1歳～2歳児＊			
正　常	397(98.8)	167(98.8)	40(93.0)
やや遅れ	4(1.0)	2(1.2)	3(7.0)
遅　れ	1(0.2)		
合　計	402(100.0)	169(100.0)	43(100.0)
社会性発達			
1歳～2歳児＊			
正　常	385(97.5)	157(98.1)	38(90.5)
やや遅れ	8(2.0)	3(1.9)	4(9.5)
遅　れ	2(0.5)		
合　計	395(100.0)	160(100.0)	42(100.0)

注）＊；5%水準有意

(3) 保育形態と保育園利用後の変化の関連（表4）

保育園の利用による効果及び変化について回答を求めた結果、「しつけができた」（否定回答1～2歳児：3.1%、1.6%、1.5%）について、深夜及び延長・夜間保育利用者は、通常保育群に比較ししつけができたことを有意に高く評価していた。

保護者自身については、「仕事に専念することができた」（4歳児以上：83.2%、85.6%、73.0%）が有意に延長・夜間保育群に高くなっていた。一方、「子どもに申し訳ない気持ちになった」の項目では、0歳児において通常保育群、深夜保育群に有意に多くなっていた（52.0%、11.1%、50.0%）。

表4　保育形態と保育園利用後の変化の関連

	通常保育群	延長・夜間保育群	深夜保育群
しつけができた			
1歳～2歳児＊			
そう思う	143(44.4)	65(54.6)	22(32.4)
まあそう思う	139(43.2)	36(30.3)	31(45.6)
どちらでもない	30(9.3)	16(13.4)	14(20.6)
あまり思わない	7(2.2)	1(0.8)	1(1.5)
思わない	3(0.9)	1(0.8)	
合計	322(100.0)	119(100.0)	68(100.0)
仕事に専念することができた			
4歳児以上＊＊			
そう思う	303(47.0)	114(51.4)	75(43.1)
まあそう思う	233(36.2)	76(34.2)	52(29.9)
どちらでもない	77(12.0)	22(9.9)	33(19.0)
あまり思わない	23(3.6)	6(2.7)	5(2.9)
思わない	8(1.2)	4(1.8)	9(5.2)
合計	644(100.0)	222(100.0)	174(100.0)
子どもに申し訳ないような気持ちになった			
0歳児＊			
そう思う	7(28.0)		4(33.3)
まあそう思う	6(24.0)	1(11.1)	2(16.7)
どちらでもない	9(36.0)	3(33.3)	2(16.7)
あまり思わない	3(12.0)	4(44.4)	
思わない		1(11.1)	4(33.3)
合計	25(100.0)	9(100.0)	12(100.0)

注）＊＊：1%水準有意、＊；5%水準有意

(4) 保育形態と保護者の育児態度の関連（表5）

保育形態と保護者の育児態度との関連を検討した結果、「他人に子どものことで迷惑をかけなくなった」（3歳児：38.7%、41.0%、48.9%）では深夜保育群が、「仕事上ストレスがたまる」（3歳児：49.0%、66.7%、32.6%）においては、延長・夜間保育群が他の群に比べ、多くの者が有意に訴えていた。

(5) 子どもの発達状態、保育園への適応への複合的な関連要因（表6）

子どもの発達、保育園への適応に対し、影響の強い項目を多変量解析により抽出し、複

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

表5　保育形態と保育者の育児態度の関連

	通常保育群	延長・夜間保育群	深夜保育群
しつけができた			
1歳～2歳児＊			
そう思う	143(44.4)	65(54.6)	22(32.4)
まあそう思う	139(43.2)	36(30.3)	31(45.6)
どちらでもない	30(9.3)	16(13.4)	14(20.6)
あまり思わない	7(2.2)	1(0.8)	1(1.5)
思わない	3(0.9)	1(0.8)	
合計	322(100.0)	119(100.0)	68(100.0)
仕事に専念することができた			
3歳児＊＊			
よくある	20(9.7)	9(15.8)	6(14.0)
時々ある	81(39.3)	29(50.9)	8(18.6)
あまりない	71(34.5)	15(26.3)	25(58.1)
全くない	34(16.5)	4(7.0)	4(9.3)
合計	206(100.0)	57(100.0)	43(100.0)

注）＊＊：1％水準有意、＊；5％水準有意

合的な関連要因を検討した。その結果、運動発達、知的発達、言語発達、社会性発達、保育園適応状況とも1％水準有意で予測が可能であることが示され、有意な関連が見られたのは以下の項目であった。

＜運動発達＞に対しては、「病気になりやすさ」（WilksのLambda（Λ）0.931、以下同様）、「子どもを叩く回数」（0.884）、「育児について相談できる相手の有無」（0.846）が有意に関連していた。病気になりやすく、子どもをたたく回数が多く、相談相手のいない場合、子どもの運動発達にやや遅れのみられる割合が高くなっていた。

＜知的発達＞に対しては、「子どもの歌を一緒に歌う機会」（0.949）、「子どもと向き合って遊ぶ時間（平日）」（0.909）が有意に

表6　子どもの発達状態、保育園への適応に関する複合関連要因

運動発達

投入順位	変数	Λ	標準化判別係数
1	病気になりやすさ	0.931	0.601
2	子どもを叩く回数	0.884	0.547
3	育児相談相手の有無	0.846	0.530

1 p　0 <.01

知的発達

投入順位	変数	Λ	標準化判別係数
1	子どもの歌を一緒に歌える	0.949	0.808
2	子どものと遊ぶ時間（平日）	0.909	0.690

1 p　0 <.01

言語発達

投入順位	変数	Λ	標準化判別係数
1	育児に自信がなくなる	0.960	1.000

1 p　0 <.05

社会性発達

投入順位	変数	Λ	標準化判別係数
1	育児に自信がなくなる	0.944	0.702
2	子どもの歌を一緒に歌える	0.906	0.657

1 p　0 <.01

保育園適応状況

投入順位	変数	Λ	標準化判別係数
1	配偶者の育児協力頻度	0.901	0.811
2	子どもの歌を一緒に歌える	0.843	0.641

1 p　0 <.01

注）＊＊：1％水準有意、＊；5％水準有意
Λ：WilksのLambda

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

関連していた。子どもと一緒に歌を歌う機会が無く、子どもと遊ぶ時間が短い場合、子どもの知的発達にやや遅れのみられる割合が高くなっていた。

＜言語発達＞に対しては、「育児に対する自信がなくなる」(0.960) が有意に関連していた。育児への自信が無い場合、子どもの言語発達にやや遅れの割合が高くなっていた。

＜社会性発達＞に対しては、「育児に対する自信がなくなる」(0.944)、「子どもの歌を一緒に歌う機会」(0.906) が有意に関連していた。育児に自信が無く、子どもと歌を一緒に歌う機会の無い場合、子どもの社会性発達にやや遅れのみられる割合が高くなっていた。

＜保育園への適応状況＞に対しては、「配偶者の育児協力頻度」(0.901)、「子どもの歌を一緒に歌う機会」(0.843) が有意に関連していた。配偶者の協力が得られず、子どもと一緒に歌を歌う機会の無い場合、保育園に行くことを楽しみにできない子どもの割合が高くなっていた。

これら複合分析の結果より、夜間保育か否かという「保育形態」は関連せず、「子どもの発達に適した育児環境が用意されているかどうか」、「保護者の相談相手がいるかどうか」、「保護者が育児に対する自信を持てる状況かどうか」が有意に関連していた。

4. 考察

(1) 夜間保育の子どもへの影響

本研究の特徴は、以下の4点にまとめられる。すなわち、第一に、本研究は本邦初の全国規模の夜間保育の影響に関する調査である点、第二に、本研究が約2,000名もの子どもとその保護者を対象としている点、第三に子どもの「発達」、「適応」を評価基準とし、夜間保育との関連を検討している点、第四に、育児環境に焦点を当て、夜間保育及び昼間保育利用者を含め、保育形態、育児環境、保護者の状況の「複合的な関連」を分析している点である。

本来、夜間保育の子どもに対する影響を明らかにするためには、因果分析が可能な研究デザインを取る必要がある。すなわち、夜間保育利用群、非利用群をコホート追跡し、少なくとも2時点において時間的な経過を踏まえ評価することが求められる。しかし、これまで日本においては、そのような客観的な研究デザインに基づいた研究は皆無である。

本研究はコホートによる追跡研究の初年度として、横断的な関連分析を実施し、あくまでもどのような要因が互いに相関しているのかを明らかにすることとした。

従来、夜間保育に関する研究は、ニーズの把握を目的としたものが多く、全国夜間保育連盟の「今後の保育対策をさぐる—夜間保育所の調査研究から」[19]、「多様化する夜間保育園—第3回夜間保育園実態調査報告書—」[20]，「ベビーホテル利用者世帯に対する福祉サービスについての調査研究」[21]、「夜間保育のニーズと要望—夜間保育所とベビーホテル利用者の実態からみた“利用者の選択性”を確保するための課題—」[3]などが報告されているものの、全国規模での子どもの発達への影響に関する調査は報告されていない。また世界的にも、寄宿型の保育は存在するものの、この種の保育形態が日本に特有なため、宿泊の形態を取らない深夜保育の影響に関する研究はほとんど見られない。

一方で、夜間保育の質を加味した子どもの発達への影響に関する実証的な根拠の無いまま、「子どもの生活リズムや医学的な見地からの問題」「子どもの生理的な限界」とし、「深夜保育は子どもの成長発達に悪影響を及ぼす」(特別区児童福祉審議会答申、1983年) に代表される見解が夜間保育の普及をはばむ大きな理由となってきた。

子どもにとって生活リズムの確立は、極めて重要である。また、心身の安らぎを得る家庭でのくつろぎ時間が必要である[22]。しかし、現状として夜間働かざるを得ない保護者の存在がある以上、保護者の就労保障と同時に子どもの育ちの保障が必須となる。

本研究に参加した夜間保育園では、保護者の就労保障との間で、いかに子どもの生活リズム及び個としての安らぎを守るか、さまざ

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

まな工夫をし、保育の質を高める多大な努力を継続していた。このような配慮のある保育環境の整備により、さらなる子どもの育ちを保障するシステムの整備へと、実質的な取り組みを確実に進める必要があろう。

本研究の結果、保育園を利用している子どもの運動、知的、言語、社会性発達は保育の形態や時間帯ではなく、家庭における育児環境や、保護者の育児への自信の無さ、サポートの乏しさなどの要因が有意に関連していることが明らかにされた。

したがって、特に夜間保育園においては、家庭的な環境をいかに充実するかが重要な課題となる。物理的な環境、人的な環境、保育プログラムを含め、子どもの育ちに適合した環境のさらなる整備による家庭の保育機能の補完が求められる。現実として、深夜保育には通常保育より発達にやや遅れのみられる子どもの在籍する割合の高いことから、通常保育よりさらに専門性の高い保育スタッフの配置が必須である[23]。

また、本研究結果より、保護者に対する精神的なサポートの重要性が示された。昨今、ひとり親家庭や育児支援者が身近にいない保護者が増加している。また時間的な余裕がなく、精神的なストレスをかかえる保護者も多い。このような状況の中、子どもとゆとりある対応がしにくいとしている。

保育園では、子どもと保護者との共に過ごす時間をできるだけ長くするという考えのもと、保護者の私用や家事の時間を保障しない園がほとんどである。また、保護者の育児放棄につながるとする考えもある。しかし、保護者の時間的なゆとりが精神的ゆとりにつながり、子どもと密度の高い時間が持てるとし、短時間の私用や家事を許可する園もある。

このような時間の提供は、保護者のストレスの解消にもつながり、子どもと向き合う心構えにも良い影響を与える傾向がみられた[23]。今後、保育園では保護者の最も身近な育児支援者としての相談などの精神的な支援に加え、保護者のゆとりの保障への柔軟な対応が求められる。

ニーズの増大が予測される夜間保育において、子どもと保護者の両者を支える保育環境の充実はますます重要となろう。

(2) 夜間保育における今後の課題

本研究より、子どもの健やかな発達と子育てを支える「真に有効な保育サービス」を目指し、今後さらに充実が必要な課題として、以下の5項目があげられる（図1）。

① 家庭の育児機能の補完及び保護者の育児意識の向上を支える役割として夜間保育の充実化

夜間保育を利用している保護者には、「育児に自信がない」または「仕事上ストレスがたまる」と訴えた者が多く、また保護者と子どもとのコミュニケーションや相互作用が希薄な者が昼間の利用者より多くみられた。したがって、必要に応じ家庭の育児機能の補完的な役割や、共に子育てをしながら啓発的・教育的な役割を担うことにより、子どもの規則的な生活リズムの維持などとともに、保護者の育児意識の向上を図り、総合的な子育て支援の役割を果たすことが重要である。

② 保護者のニーズに適応したサービスの提供

保育のニーズとして、病児保育、休日保育、学童保育、深夜保育、緊急宿泊保育など、さまざまな形態の保育サービスが必要とされていることが明らかになった。保護者のニーズに見合ったサービスを提供するため、保育専門職の柔軟な勤務体制、保育環境の改善に向けてのさまざまな課題の解決が必要である。

③ 良質な保育サービスを提供するための専門職の専門性の向上

保育専門職の質を継続的に高めるような教育システムは、保育サービスの充実にとって極めて重要である。子どもに対する保育の技術に加えて、保護者に対する育児への自信を回復し増進するための啓発や教育の技術を含む子育て支援についても専門性の高い保育専門職の養成・研修が求められる。

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

④　夜間保育に対する地域社会及び自治体の理解の促進

地域社会における夜間保育に対する認識や理解度はいまだ低いため、地域に開かれたサービスの充実が期待される。夜間保育への理解を深めるためにも、地域社会と連携した活動や、情報の提供をさらに拡充していくことが必要であると考えられる。

⑤　さらなるサービスの質の向上を意図した評価システムの構築

保育サービスの質の向上を図り、対象者のニーズを適切に充足し、よりすぐれたサービスを提供する専門職や保育園が高く評価されるというサービスのインセンティブが働くようなシステムの構築が求められる。そのためには、サービスの質の向上を意図した評価基準の指標化[24]とシステム化を推進する必要がある。

5. まとめ

全国の認可夜間保育園を利用している子ども及び保護者、保育専門職を対象に、夜間保育の子どもへの影響及び課題の検討を行った。その結果、子どもの発達状態には、「保育の形態や時間帯」よりも「家庭における育児環境」及び「保護者の育児への自信やサポートの有無」などの要因が強く関連しており、今後のサービスのあり方が明かにされた。すなわち、夜間保育を含む多様なニーズに柔軟に対応し、育児に関するよき相談相手となり、保護者の育児への自信の回復を促すなど、保護者に対する「子育てを支える」ための地域に開かれたサービスの充実である。

加えて、客観的な評価に基づくサービスのさらなる質の向上を、継続的に可能とするシステムの構築が強く期待されるところである。

謝辞：本研究は、三菱財団の助成を得て実施したものである。全国夜間保育連盟　金戸述会長をはじめ、ご協力いただきました連盟の皆様、連盟顧問の大阪市立大学　山縣文治助教授に深謝いたします。

参　考　文　献

1. 安梅勅江、エイジングのケア科学―ケア実践に生かす社会関連性指標―、川島書店、2000年
2. 保健福祉ケアシステム研究会、保健福祉のケア科学、ベネッセ、1998年
3. 金子恵美、夜間保育のニーズと今後の展望―夜間保育所とベビーホテル利用者の実態から見た“利用者の選択性”を確保するための課題―、日本社会事業大学紀要、1998年
4. 特別区児童福祉審議会、夜間保育・延長保育の実施について（答申）、1983年
5. 厚生科学研究、保育所における長時間保育実施上の諸条件に関する研究、1974年
6. Caldwell BM, Bradley RH. Home observation for measurement of the environment.Center for child development and education. University of Arkansas at Little Rock. no date
7. Coons EC, et al. Preliminary results of combined developmental/environmental screening project. In Frankenburg KW. Early identification of at risk children. Proceedings of 3rd international conference Jonson Hole. Wyoming, 1980
8. Yarrow LJ, Rubenstein JL, Peolersen FA. Infant and environment; Early cognitive and motivation development. John Wiley & Sons, 1975
9. Gottfried AW. Home environment and early cognitive development. New York: Academic Press, 1984
10. Barnard KE, Bee HD. Child health assessment. NCAST, 1983
11. Werner EE. High risk children as adults; vulnerability and resiliency, Proceedings of 5th International conference of Early Identification of childr en at Risk. 1987
12. Bronfenbrenner U. The ecology of humandevelopment. Harvard University Press, 1979

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

13. 安梅勅江：少子化時代の子育て支援と育児環境評価－保健・福祉・保育の連携による実証研究－．東京：川島書店、1996
14. Anme T, Takayama T. Evaluation of Home Stimulation for Normal and Handicapped Children in Japan. In Early Childhood Toward the 21st Century. Hong Kong: Yew Chung Education Publishing Company. 1990; 427-430.
15. 安梅勅江．育児環境の評価法の開発及びその保健福祉学的支援に関する研究－18か月児の育児環境の把握と支援－．日本保健福祉学会誌、1994；1(1)：13-25.
16. 安梅勅江．発達的視点からみた生活環境の指標化とその保健福祉学的支援に関する研究．国立身体障害者リハビリテーションセンター紀要．1991；12：29-36.
17. Anme T., Risk Assessment using Evaluation of Environmental Stimulation in Japan, National Roundtable on Child Protective Services Risk Assessment(9), 37-47、1995
18. 安梅勅江、18か月児の育児環境評価の関連用因に関する研究、公衆衛生学会誌44(5)、346-352、1998
19. 全国夜間保育連盟、今後の保育対策をさぐる－夜間保育所の調査結果から－、1989年
20. 全国夜間保育連盟、多様化する夜間保育園－第3回全国夜間保育園実態調査報告書－、1997年
21. 田邊敦子、ベビーホテル夜間利用者世帯に対する福祉サービスについての調査・研究、1992年
22. Anthony EJ, and Cohler BJ, The Invulnerable Child, The Guilford Press, 1987
23. 全国夜間保育連盟、夜間保育の子どもへの影響および課題に関する報告書、2000年
24. 金田利子、諏訪きぬ、土方弘子、「保育の質」の探求、ミネルヴァ書房、2000年

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

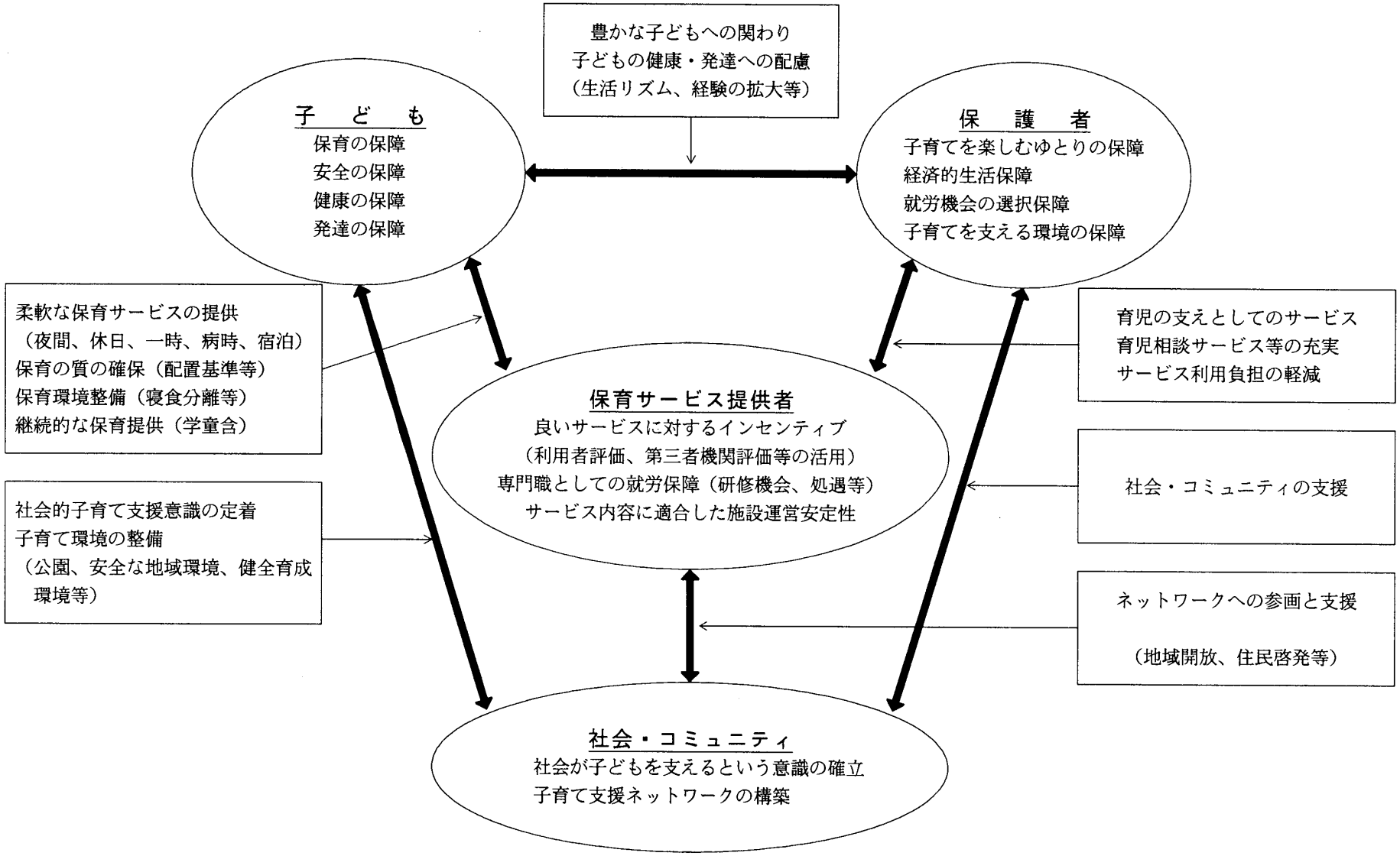

図１　夜間保育における今後の課題

NII-Electronic Library Service

Japanese Society of Human Science of Health-Social Services

Evaluation of Child Night Care in Nursery

Tokie Anme, Ph.D.
Jaehee Oh, Ph.D.

This study clarified a relationship between the type of nursery care (day vs. night) and child development/adaptation to nursery. The subjects were children and caregivers who used child day care or child night care in nursery. Caregivers asked to fill the questionnaire on raring environment, self-efficacy and support for child raring. Child care professionals asked to evaluate development and adaptation to nursery for each child. 1,949 caregivers and 2,905 children were analyzed by discriminant analysis. The results were as follows;

1) Motor development was significantly related to health status, not slapping, and support for child raring.
2) Intelligence development was significantly related to sing songs together, and length of playing with child.
3) Language development was significantly related to self-efficacy for child raring.
4) Social development was significantly related to self-efficacy for child raring, and sing songs together.
5) Adaptation to nursery was significantly related to support for child raring, and sing songs together.

These results indicated that not the type of nursery care (day or night), but the child raring environment, caregiver's self-efficacy and support for child raring were strongly related to child development and adaptation to nursery. Further research must be done to promote evidence - based services for more effective and high quality child night care.

Key Words; child care, night care, child development, raring environment, self-efficacy

NII-Electronic Library Service